

「自己探求」

● 目 次

1 研究の概要

1 目標	29
2 基本方針	29
3 研究の重点	29

2 研究の内容

1 自己探求の構成	29
2 表現探究	33
3 学問探究	34
4 社会探究	36
5 教科探究	38

3 実践例

〈その1〉表現探究	40
〈その2〉学問探究 自然科学系講座「宇宙と人間」	43
〈その3〉社会探究	47
〈その4〉教科探究 保健体育B「スポーツの歴史を探る」(応用・発展型)	51

田 中 啓 司 元 村 義 信
山 岡 裕 子 伊 東 雅 子
山 本 圭 介 小 松 ひとみ
福 山 理 恵

1 研究の概要

1 目標

本校では、中等教育期を「人間としての生き方を考え、自己の将来を見定める時期」ととらえており、その前期に当たる中学校段階では、個性の探求を十分に保障することが大切であると考えている。そこで、自己の個性や生き方を探求する教育活動の開発に取り組むこととした。

— 「自己探求」研究の目標 —
自己の個性や生き方を探求する学習ステージを開発する。

2 基本方針

本研究を進めるに当たり、研究の基本方針を次のように設定した。

— 研究の基本方針 —
生徒に自己の適性を探らせるさまざまな探究活動を設定し、指導・評価の在り方を探るとともに、実践・検証を行う。
各探究活動相互の関連や他の領域との関連を明らかにする。

3 研究の重点

「自己探求」を次の4つの探究活動で構成し、それぞれの研究の重点を設けて、研究を進めることとした。

探究活動名	研究の重点
表現探究	学習目標・内容を明らかにし、生徒の自己理解を図る指導の在り方を検討する。
学問探究	将来に向けての夢が広がるような講座を開設し、その内容や学習方法等について検討する。また、大学や高等学校からゲストティーチャーを招へいし、人材リストを作成するとともに、活用方法を検討する。
社会探究	人類や社会に対する知的な好奇心を喚起するガイダンスの在り方を検討する。また、生徒の課題追究活動を、より効果的なものにするための学習環境について検討する。
教科探究	必修教科における生徒の学習状況を的確に分析するとともに、生徒の学習欲求を把握し、生徒に必要な講座の内容を検討する。

2 研究の内容

1 自己探求の構成

(1) 「自己探求」のねらい

生徒一人一人の可能性を引き出す多様な探究活動を設定することにより、さまざまな面から自己を見つめ、理解し、理想とする自己の実現に向けて意欲的に歩み続ける生徒を育成する。

(2) 「自己探求」の内容

「自己探求」における各探究活動の開設

研究の1年次に当たる昨年度は、生徒が自己の個性や生き方を探求する場を保障するために、表1に示すように可能な限り多様な探究活動を設定した。

表1 「自己探求」における昨年度の探究活動及び授業時数

	表現探究	学問探究	社会探究	教科探究	地域探究	振り返り	計
第1学年	35			18	12		65
第2学年		35	35	35	15		120
第3学年		35	70	70	15	10	200

この実践の中で、さまざまな探究活動に熱心に取り組み、探究の対象と自己とのかかわりを考える機会を得た一方で、一つ一つの探究活動を未消化のまま終わらせる生徒が見られた。

そこで本年度は、表2のとおり、探究活動を表現探究・学問探究・社会探究・教科探究の4つに絞り込み、生徒の活動に無理が出ないよう適切な時間数で構成した。

表2 「自己探求」における本年度の探究活動及び授業時数

	表現探究	学問探究	社会探究	教科探究	合計
第1学年	13				13
第2学年	20	28	20		68
第3学年		28	60	60	148

各探究活動のねらい

探究活動名	ねらい
表現探究	さまざまな表現活動を通して、自己のものの見方や考え方を発掘し、自己理解を深めさせる。
学問探究	探究の対象をさまざまな学問の内容とし、専門的な内容の講座を受講させることで、生徒の知的好奇心を喚起し、学問に対する自己の適性を探らせる。
社会探究	人類や社会の諸問題を基にして課題を設定し、追究させることを通して、社会と自己のかかわりについて探らせる。
教科探究	必修教科における自己の学習の成果や課題に照らして教科を選択し、追究させることで、各教科における自己の学習について考えさせる。

各探究活動の位置づけ

各探究活動の位置づけは、図1のような「課題設定の主体」と「学習内容」を軸とする図により説明することができる。右に位置するほど教師が課題を設定することが多くなり、左に位置するほど生徒の課題設定から学習が始められる。また、上に位置するほど学習内容がより専門的になり、下に位置するほどより総合的になる。学問探究は、大学や研究機関、高等学校の先生を講師として招へいして、専門的な内容の講座を開設するため、教師の課題設定が多く、より専門性が高まり、右上に位置することとなる。これに対し、社会探究は、教師が人類や社会の諸問題についてのガイダンスを十分に行った後、生徒が探究したい課題を自ら設定するため、左下に位置することとなる。同様にして、4つの探究活動を示すと図2のようになる。

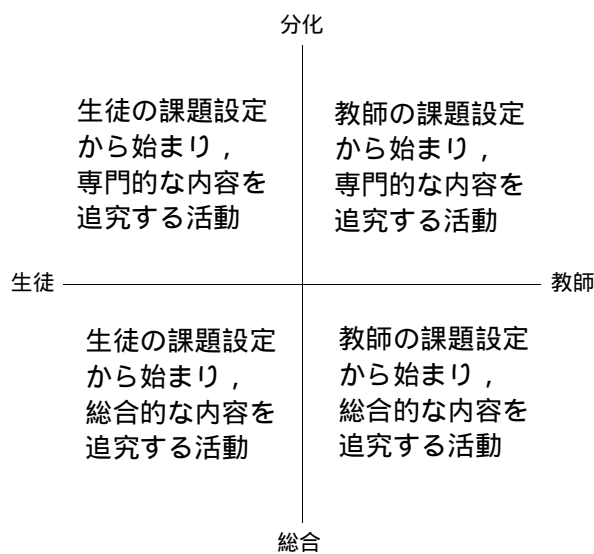


図1 課題設定の主体と学習内容から見た探究活動の位置

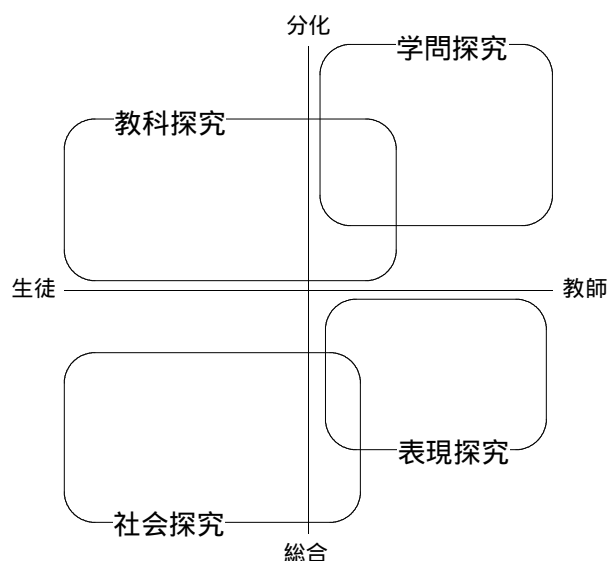


図2 自己探求における各探究活動の位置

探究活動の開設時期

各探究活動の開設時期を、表3に示す。

表3 各探究活動の開設時期

期は4月～7月， 期は9月～12月， 期は1月～3月

第1学年	第2学年			第3学年		
期	期	期	期	期	期	期
()表現探究						
	()学問探究			()学問探究		
		()社会探究				
			()教科探究			()教科探究

これにより、次のような学びを期待するものである。

- () 表現探究は、「自己探求」の学習のスタートとして、第1学年 期から第2学年 期までの期間に開設し、生徒が自己のものの見方や考え方に気づき、更に自分のことを知りたいという欲求を持てるようにした。また、この時期に、他の探究活動でも生かされる自己のものの見方や考え方を深く掘り下げていく方法、それを効果的に表現するための工夫を身につけさせたいと考えた。
 - () 学問探究は、第2学年 期、第3学年 期に開設し、学問の専門性や研究対象の多様性に気づき、研究に携わる人々の姿に憧れを抱けるようにした。特に、第2学年での学習に比べて、第3学年では、教科探究や社会探究の活動を通して自己理解の幅を広げたことにより、自己の適性を確かめようと、より高い意識で講座を選択し、探究できるものと考えた。
 - () 社会探究は、第2学年 期から第3学年 期までの期間に開設した。このことにより、学問探究や教科探究での経験が、課題設定の際に多くの視点を持たせたり、解決へのアプローチの仕方に広い視野を与えたりして生かされるものと考えた。
 - () 教科探究は、第3学年 期・ 期に設定し、生徒が学問探究で知った学問の世界につながる教科への自己の取組について考えたり、社会探究の課題追究過程で必要となる基礎的な力を高めたりすることができるようにした。特に、第3学年 期の教科探究は、自己探求の4つの探究活動のすべてを経験し、自己の適性や可能性に気づき、将来の生き方や理想の自己について考えた生徒が、現在の自分にできる教科の学習への興味・関心を高め、その取組や適性を見直すことができる場とした。
- (3) 「自己探求」の評価
- 「自己探求」の各探究活動における評価は、表4に示すように、生徒がファイルやノートに記録した学習履歴を基に、振り返りシートや面談によって行う。また、「自己探求」全体の評価として、生徒には、各探究活動の取組や自己評価を生徒用個人カルテに記入させ、常に自己の学習履歴を振り返らせることで、生徒自身が成長や適性をとらえられるよう指導する。学級担任は、生徒の作品や学習シート、各活動の振り返りの時間における自己評価の記録を電子文書化し、教師用個人カルテを作成する。これにより学習履歴を残すだけでなく、3年間の生徒の変容や成長ぶりを総合的に評価できるようにした。

表4 各探究活動の評価の観点と評価材及び評価担当者

探究活動名	評価の観点	評価材及び評価担当者
表現探究	自他の理解への意欲 表現の工夫 自己の考えや思いを明らかにする力	・生徒の作品，発表 ・各単元の振り返り用紙 ・表現探究全体の振り返り用紙 【表現探究担当教師】
学問探究	探究への関心・意欲 学問に対する見方や考え方 自己の適性，可能性	・各講座の学習の記録 ・各講座の振り返り用紙 ・学問探究全体の振り返り用紙 【学級担任】
社会探究	人類や社会の諸問題についての感性・主体性 共同・共生の意識 社会的諸事象についての創造性 調査・研究についての技能 や自己の意見の表現 人類や社会の諸問題についての知識・理解	・活動計画表 ・調査の記録 ・発信用レポート ・卒業論文 【各グループ担当教師】
教科探究	課題解決に向けての関心・意欲・態度 課題を追究する力 課題追究の成果	・学習計画表 ・学習の記録 ・各講座の振り返り用紙 【各講座担当教師】

2 表現探究

(1) ねらい

さまざまな表現活動を通して、自己のものの見方や考え方を発掘し、自己理解を深めさせる。

(2) 実施要領

- 1 授業時数は、第1学年13時間、第2学年20時間とする。
- 2 開設期間は、第1学年 期から第2学年 期までとする。
- 3 生徒一人一人が持つ思いや課題に応じるために、ティーム・ティーチング（TT）による指導を行う。
- 4 第1学年、第2学年の教師がそれぞれ指導に当たる。

(3) 内容

表現探究における主な指導内容を、次のように設定した。

送り手及び受け手の姿勢
 さまざまな表現手段の特長や効果
 ・音声言語表現（言葉の明確さ、間の取り方、音調、強勢、速度 等）
 ・音表現（効果音、BGM 等）
 ・ビジュアル表現（文字、絵、図表、カット、枠組み、記号、レイアウト 等）
 ・身体表現（表情、身ぶり、うなずき、アイコンタクト 等）
 表現手段の組み合わせによる表現効果
 内容や受け手に応じた表現方法の選択・工夫
 視聴覚機器やコンピュータ等の効果的な利用
 対話、討論、ディベートの意義や効果

(4) 探究の概要

学年	時間	単元名	主な活動とねらい
第1学年	1	表現ってなあに？	・課題についての自己の思いを紹介するレポートの作成を通して、これまでの表現体験を振り返らせる。また、表現活動には、自己の思いを探る自己理解の活動を伴うことに気づかせるとともに、多様な表現手段に目を向けさせる。
	2	見えますか？私の思い	・レポートを表現の意図に応じて練り直させ、第2プランを作成させる。また、互いに鑑賞し合うことで、他者の表現のすばらしさや多様性に触れさせるとともに、内容に応じて表現を選択する必要性を感じさせる。
	10	あなたの心をつかむ私はアピール名人	・さまざまな表現手段を取り入れたスピーチに取り組みさせることで、自己の思いを深く掘り下げる方法や効果的な表現方法について学ばせる。
第2学年	14	照らし合おうあなたと私の心と心	・対話や討論を行う中で、自己の考えを生き生きと表現させるとともに、異なる立場の意見を参考にして、自己のものの見方や考え方を振り返らせる。
	5	私ってこんな形	・自己をいろいろな形で表現する活動やエゴグラムに取り組みさせることで、自分自身を更に知りたいという意欲を高めさせる。
	1	これまでの学習を振り返ろう	・学習シートや作品を基に、自己のものの見方や考え方の変容をとらえるとともに、表現方法を確認させ、今後の学習や生活に生かす意欲を高める。

(5) 指導上の留意点

自己の思いを明らかにしたり、表現について振り返らせたりする活動では、個別学習の形態を中心とする。また、対話における場の雰囲気や発信対象への伝わり方などをつかむ活動では、必要に応じてグループ別・コース別学習などのさまざまな学習形態をとり、指導を行う。

生徒の思いや課題の多様性に応じるために、TTによる指導において、1人の生徒に2人の教師がかかわることで、異なる視点から生徒に助言を行う。

表現の起点となる自己の思いの発掘を丁寧に行わせるとともに、さまざまな表現活動の場において、自己の思いに立ち返るような題材構成、学習指導の工夫を行う。

3 学問探究

(1) ねらい

探究の対象をさまざまな学問の内容とし、専門的な内容の講座を受講させることで、生徒の知的好奇心を喚起し、学問に対する自己の適性を探らせる。

(2) 実施要領

- 1 授業時数は28時間（生徒オリエンテーション、振り返りを含め全6回）とし、 期に実施する。
- 2 第2・3学年合同で実施する。
- 3 人文科学、社会科学、自然科学、文化芸術の4つの分野の中にさまざまな講座を開設する。
- 4 2時間連続の授業を週に1回実施する。
- 5 同時期に14講座以上を開設することとし、1講座当たりの平均人数をできるだけ少なくする（1講座当たり平均約30名）。
- 6 生徒の選択の機会をできるだけ多くするために、原則として4時間で完結する講座を設定する。また、同じ内容の講座を2回以上設定する。

(3) 内容

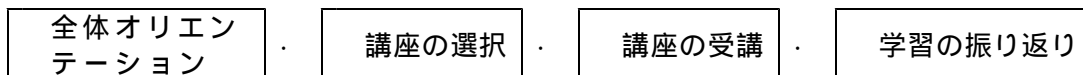
講座の開設に当たっては、教科の枠にとらわれず、大学の授業科目にあるような専門性の高い内容の講座を開設し、将来に向けての夢が広がるようにした。また、より専門的な立場からの指導を可能とするために、できるだけ大学や研究機関、高等学校の先生方をゲストティーチャーとして招へいすることとした。

以下に開設講座の一例を示す。

講座名：自然科学系講座「宇宙と人間 宇宙開発の歴史と宇宙探査の最前線」
内 容：地球周回軌道への機器や人間の投入等、輸送システムとしてのロケットの仕組みと飛行の原理を学ぶ。また、現代社会を支える実用衛星から地球及び宇宙の謎を探究する科学衛星探査機の仕組み、「はやぶさ」等のそれぞれのミッションの計画・運営について知る。
ゲストティーチャー：的川泰宣先生(宇宙航空研究開発機構執行役・宇宙教育センター長)

(4) 実施の手順

学問探究における実施の手順は、次のとおりである。



全体オリエンテーション

第2・3学年合同で実施し、学問探究の意義やねらい、各講座の主な学習内容、講座の選択の仕方について生徒に知らせ、学習に対する生徒の目的意識を高める。

講座の選択

各時期の開設講座の中から1講座ずつ選択させる。その際、4つの分野すべてを選択させるなどの制限を設けず、興味・関心や将来の目標等を基に選択させる。また、学級担任や講座担当教師が個別に相談を行うなどして、適切な選択になるようにする。

講座の受講

選択した講座を受講させる。その際、各講座の学習プリントや資料等の学習の記録は、すべてファイルにとじさせて、自己の適性を考える際に活用させる。

学習の振り返り

各講座が終了した翌日に、学習の振り返りを行わせる。また、学問探究全体を通しての振り返りでは、学級担任との面談を行い、自己の学習履歴を確かめさせて、学問に対する自己の適性について考えさせる。

(5) 開設講座及び選択の実際

本年度は、人文科学系 4 講座，社会科学系 2 講座，自然科学系12講座，文化芸術系 6 講座の全24 講座を検討し，計20名のゲストティーチャーを招へいた。次の表 5 に，開設講座及び履修人数を示す。

表 5 開設講座及び履修人数

開設講座		回	1	2	3	4	5	6
人文科学系	長崎学入門		40	32	11	12	14	8
	心理学		-	-	44	-	92	32
	英語で算数		26	4	8	17	-	-
	愛の哲学		58	49	-	52	-	-
社会科学系	裁判員制度とは		-	-	-	-	42	82
	異文化理解		17	14	5	10	2	4
自然科学系	統計入門		37	41	21	38	14	7
	植物たちの生きる知恵		8	9	5	6	-	6
	火山を知り，火山と生きる		10	32	11	31	5	4
	宇宙と人間		50	45	24	56	20	23
	船舶運用術		-	-	65	-	45	70
	附中生健康増進計画		-	-	-	63	75	13
	環境科学入門		45	-	-	12	-	-
	0と1の世界		-	90	-	-	50	-
	プログラミング入門		-	-	128	-	-	83
	数学を使って考えよう		5	4	-	17	-	-
	スポーツを科学する		31	33	32	-	-	-
心に感動を！体に心地よさを与える運動		-	9	-	12	38	41	
文化芸術系	「日本」再考		13	8	10	20	7	4
	発声入門と音楽づくりのポイント		-	-	25	30	-	-
	これであなともオペラ通		32	8	-	-	3	23
	ペーパーナイフを作ろう		37	31	-	-	-	-
	素材と技法		-	-	20	33	-	-
	フィルム絵の秘密・透視図法をマスターしよう		-	-	-	-	2	9

受講させる講座の決定に当たっては，第 1 希望を優先するように努めた。その際，講座選択の希望に偏りがあつたり，受講者数に制限のある講座の希望者数が制限人数を超えたりしたため，同じ内容の他の回の講座に変更することで対応した。

4 社会探究

(1) ねらい

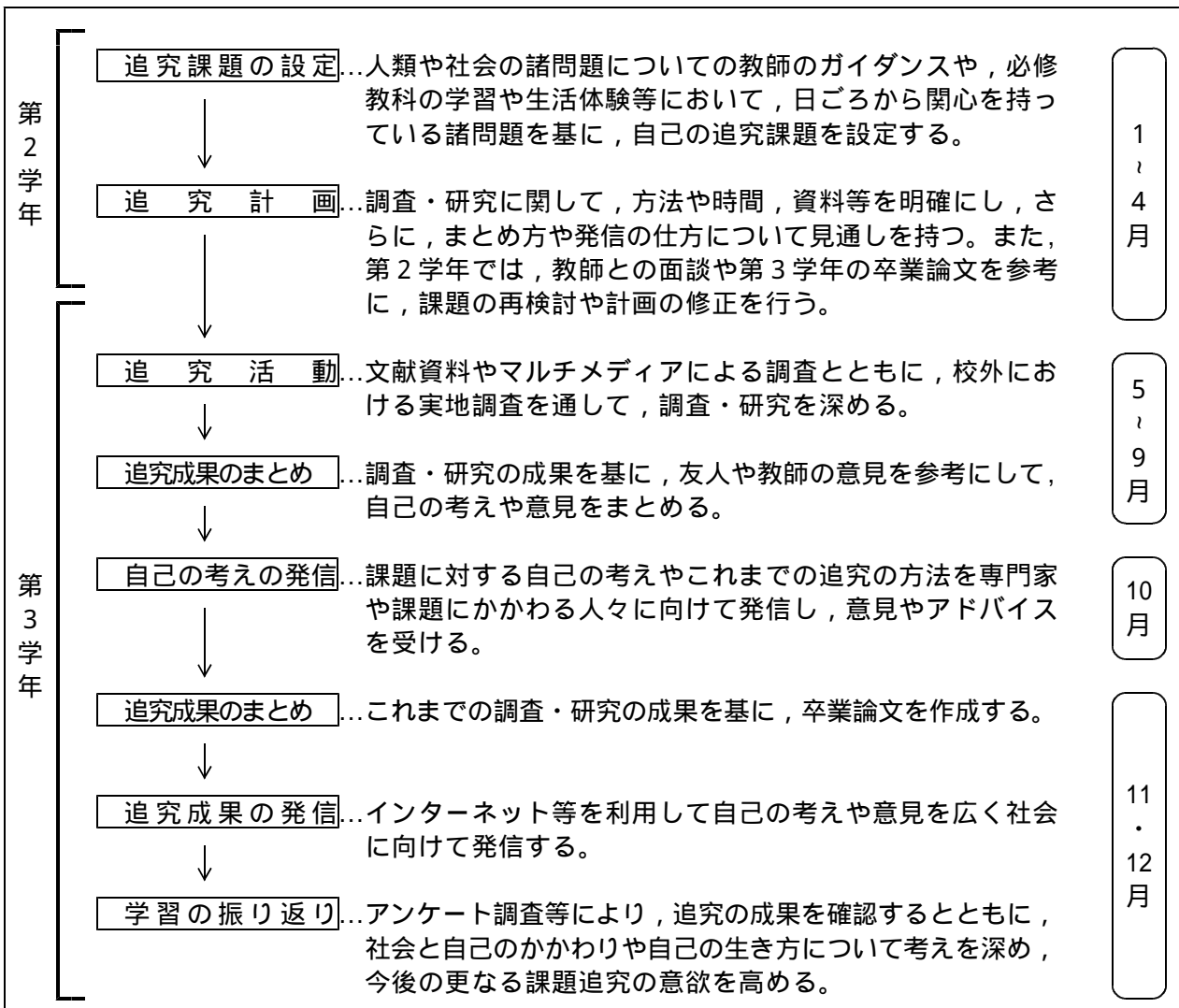
人類や社会の諸問題を基にして課題を設定し、追究させることを通して、社会と自己のかかわりについて探らせる。

(2) 実施要領

- 1 授業時数は、第2学年20時間、第3学年60時間とする。
- 2 開設期間は、第2学年 期から第3学年 期までとする。
- 3 授業は2時間連続で行う。
- 4 原則として、各学年所属の教師が担当する。

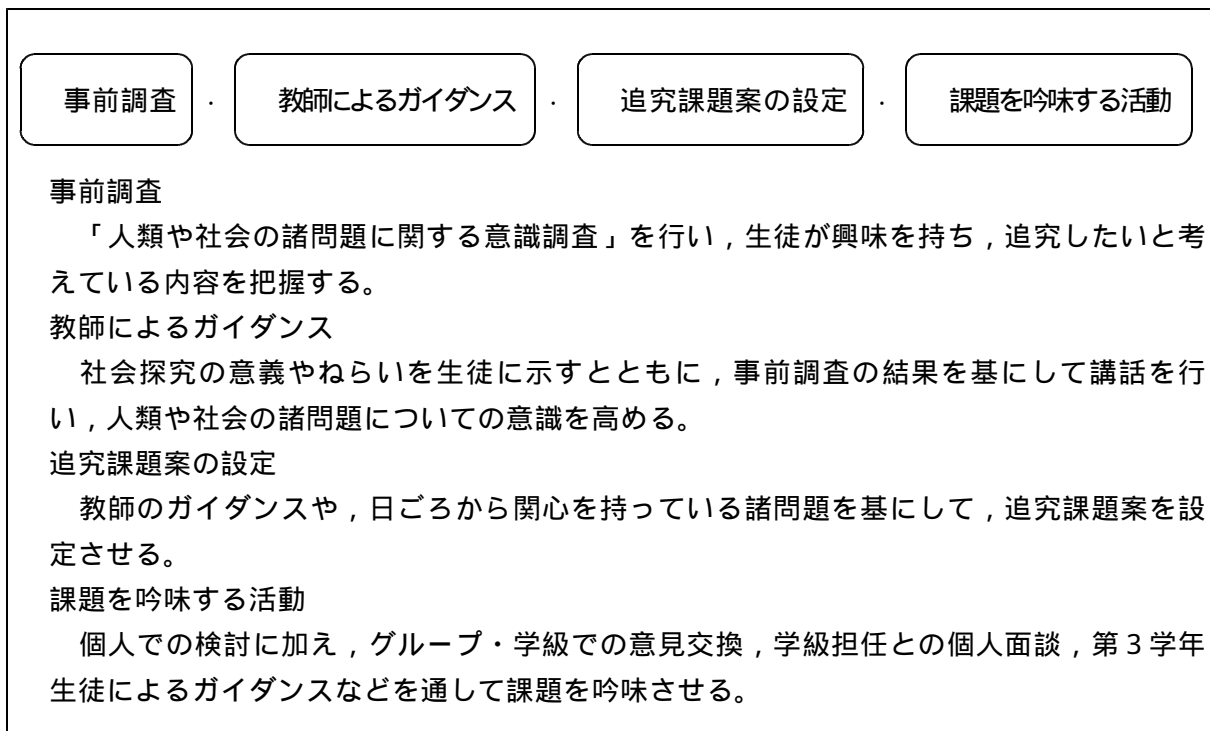
(3) 学習の流れ

人類や社会の諸問題の中から自らの課題を設定し、追究する際に、以下のような学習の流れで、社会と自己のかかわりについて探らせていくこととした。



(4) 追究課題設定の実際

生徒が主体的に学習に取り組み、自己の個性を伸ばせるような活動を展開していくために、生徒の特性や興味・関心等に応じた適切な課題設定をさせる必要があると考えた。そこで、以下の手順で追究課題を設定させることとし、自己の追究課題をじっくりと検討できるようにした。



生徒が設定した追究課題の一部を次に示す。

- ・地球温暖化によって世界はどうか調べよう
- ・バリアフリーの今とこれからの必要性を知ろう
- ・年金制度はどうか、僕の世代までカバーできるのか
- ・日中の「経済面」から見た今とこれからの発展について知ろう
- ・現代人の食生活を見直し、生活習慣病の解決策を見つけよう
- ・貧困に苦しむ子どもたち「ストリートチルドレン」について詳しく理解しよう
- ・個人情報はどうやって守られているのか明らかにしよう
- ・日本が国連の常任理事国入りすることと平和の関係を調べよう
- ・外国と比較して日本の文化伝承の様子を探ろう

なお、生徒の設定した追究課題を「環境」「政治」「経済」「健康」「人類」「情報」「平和」「文化」の8つのグループに分け、類似課題の生徒を所属させることとした。今後、このグループを活動の母体とすることによって、教師が生徒の活動を把握しやすくなるとともに、生徒が協力し合って課題を解決しやすくなるものと考えた。本年度の第3学年の各グループの人数は、次のとおりである。

グループ	環 境	政 治	経 済	健 康	人 類	情 報	平 和	文 化
人 数	83	8	13	37	31	4	22	8

5 教科探究

(1) ねらい

必修教科における自己の学習の成果や課題に照らして教科を選択し，追究させることで，各教科における自己の学習について考えさせる。

(2) 実施要領

- 1 授業時数は，第3学年60時間とし，第3学年 期・ 期にそれぞれ30時間ずつ設定する。授業は2時間連続で行う。
- 2 期12講座， 期11講座を開設し，各期2講座ずつ計4講座を選択できるようにする。
- 3 講座選択に当たっては，生徒の第1希望から第3希望までを調査し，1つの講座の人数が30名以内になるよう人数調整を行う。その際，なるべく第1希望になるように配慮するが，やむを得ない場合は希望順に調整する。
- 4 全体オリエンテーションは， 期・ 期にそれぞれ1回ずつ行う。

(3) 内容

各必修教科において，それぞれの教科の特性や授業における生徒の学習状況等に照らして，生徒にとって必要性が高いと思われるものを主な学習内容として設定する。その際，基礎・基本の習得を図る講座をA，応用・発展的な学習内容に触れさせる講座をBとして生徒に提示する。

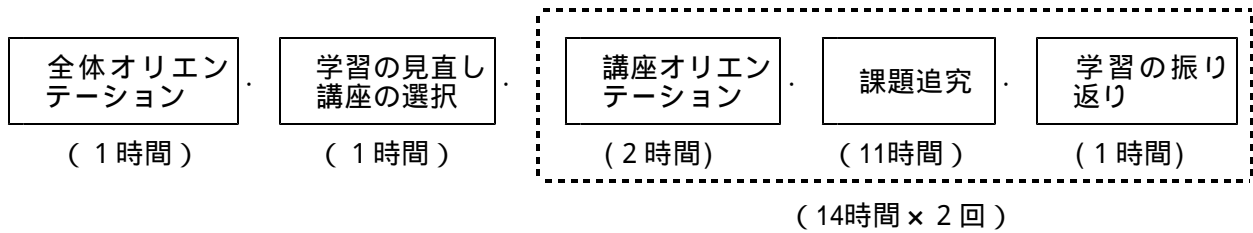
また，生徒の自主計画によって学習を進めるタイプ，教師が一斉または個別の授業を行い学習を進めるタイプ，その2つを併せて行うタイプの3種類の授業形態についても全体オリエンテーションにおいて生徒に知らせることで，選択する際に参考とさせる。表6は生徒向けガイダンス資料の例である。

表6 教科探究ガイダンス資料の例

教科	期	タイトル・内容
国語		国語A「習得！！古文の読解法」(基礎・基本型)
		学習内容を古文に絞る。短く平易な文章を数多く読み解く中で，自分なりの読解方法をつかむことを目標とします。古文に触れたとき，文章の内容を正確につかめなかったという課題を克服したい。
数学		数学A「基礎・基本の定着させよう」(基礎・基本型)
		1，2年生で学習した内容を問題演習を通して復習します。これまでの数学の学習に対して苦手意識を持っているあなた。この機会にとことん取り組んで，苦手意識を克服しましょう。
保健体育		保健体育B「スポーツの歴史を探る！」(応用・発展型)
		スポーツの起源とは？現在のルールになるまでにどのような変遷があったのか？書籍や資料を基にまとめていき，スポーツ年表をつくります。後半では，自分たちで新しいスポーツ(ニュースポーツ)を考案しましょう。

(4) 学習の流れ

教科探究における学習の流れは、次のとおりである。



全体オリエンテーション

教科探究の意義・ねらいを確認し、講座の主な学習内容や開設の趣旨を生徒に知らせる場として、期、期にそれぞれ実施する。その際、表6のガイダンス資料を生徒に事前に配付し学習内容を知らせるとともに、学習内容や授業形態等について詳細に説明することで、生徒の目的意識を高める。

学習の見直し・講座の選択

開設講座の中から各期2講座ずつ計4講座を選択させる。その際、必修教科における自己の学習状況を振り返らせた後、第3希望まで調査するとともに、より適切な選択となるよう、自己の学習状況と各講座の内容及びA、Bの区分との関連を十分に検討させたり、必要に応じて学級担任が個別に相談を行ったりする。

講座オリエンテーション

選択した教科に対する生徒の考えや知識・技能の習得状況など、現在の学習状況を正確に把握するため、個人面談や質問紙を用いた調査を行う。その結果を基に、個に応じた課題を設定したり、適切な評価を行ったりするなど、教科探究全体を通じた基礎資料として活用する。

課題追究

教科探究では、生徒一人一人にノートを用意させ、すべての講座の学習記録を記入したり、資料をはり付けたりさせることで、教科探究の学習履歴を残させる。また、評価については、講座担当教師が、このノートに随時記入していく。

学習の振り返り

講座オリエンテーションで行った調査を再度行うなどして、学習の成果と今後の課題について確認させる。また、学習の振り返りを記入させて回収し、コメントを記入した上で返却する。

(5) 選択の状況

期の講座の選択人数を次に示す。

期前半

(生徒数206名)

講座	国語A	社会A	数学A	数学B	理科A	音楽A	美術A	保体B	技術B	家庭B	英語A	英語B
人数	27	30	16	16	3	12	3	12	30	30	9	18

期後半

(生徒数206名)

講座	国語A	社会A	数学A	理科A	音楽A	美術A	保体B	技術B	家庭B	英語A	英語B
人数	30	30	21	6	18	4	14	30	30	8	15

3 実践例

その1 表現探究 単元「あなたの心をつかむ私はアピール名人」

1 実践に当たって

表現探究は、自己探求の4つの探究活動のスタートに当たることから、生徒が自己のものの見方や考え方に気づく活動を重ねることで、更に自己理解を深めたいという意欲を高めることが大切である。そこで、第1学年において、さまざまな表現手段を組み合わせたスピーチづくりを行う単元「あなたの心をつかむ私はアピール名人」を設定することとした。本実践では、スピーチの内容となる材料選びや構想メモづくり、表現構想図づくりなどを行う中で、常に自己の思いを見つめ直し、それを効果的に伝える方法を学ばせたいと考えた。また、実際にスピーチを行い、自己の思いが相手に届いたときの喜びを感得させることが、次の表現活動や自己理解への意欲につながるものと考えた。ここでは、その学習指導の実際について述べる。なお、本実践は、平成17年度第1学年において行ったものである。

2 単元の指導計画

単元の指導計画をそれぞれ次のように考えた。

時	題 材	指 導 内 容
1	私の思いを探ろう	「私の幸せなこの瞬間」「私のおすすめの旅」「これでいいのか日本人」の課題の中から1つを選択し、アピール文を考える中で、課題に対する自己の思いや考えに気づかせる。
3	私の思いが相手の心に届くまで	自己の思いを的確に表現できる材料選びや効果的な組み立てを考える構想メモの作成を通して、自己の思いや考えを更に深めさせる。
2	効果的な表現手段を考えよう	思いを伝えるための材料を、スピーチにおいて、いつ、どこで、どのように提示するかを表す表現構想図を作成させる。その中で、内容や表現意図、相手に応じた表現方法を工夫させる。
4	自己の思いを伝えよう	級友の前でスピーチを行うことで、自己の思いを表現することの喜びを感得させる。また、級友の発表を意図を持って聞くよう指示することで、聞き手としてのよりよい態度を身につけさせる。

3 指導の実際

「私のおすすめの旅」「私の幸せなこの瞬間」「これでいいのか日本人」の課題の中から、生徒一人一人にスピーチの課題を1つ選ばせた。そして、課題から思い浮かぶアピール内容をいくつか挙げていく活動を行う中で、自己の思いを発見させるようにした。生徒は、アピール内容を更に詳しく分析することで、それを支えている自己の思いを明確にしていった。自己の思いが明確につかめない生徒に対しては、個別に面談を行うことで援助した。生徒Aは、図3に示すように、課題「私の幸せなこの瞬間」を選択し、「寝るとき」「宿題がないことを思い出したとき」などの自分が幸せだと感じる瞬間をいくつか挙げていく中で、実は自分が普段、嫌なことから逃避しているときに幸せを感じていることに気づいた。

次に、自己の思いを伝えるための材料の配置や結論の位置を考えて構想メモにまとめさせた。それを基にスピーチ原稿を作成させるとともに、ビジュアル表現や音楽などを組み合わせたスピーチとなるよう表現構想図を作成させた。その際、スピーチの持ち時間については提示せず、各自で設定させることとした。多くの生徒は、集中して聞いてもらえる時間を予想して、スピーチの時間を5～10分に設定していた。このような活動の中で、生徒は自己の思いを更に深く見つめ直し、明確にしていった。生徒Aは、図4に示すように、幸せな瞬間をランキング形式にし、絵を用いて紹介する工夫を行った。また、自分が就寝時に聞いている音楽を実際に聞いてもらおうと、CDを準備品として挙げている。さらに、その材料を提示するタイミングを考えたり、指示棒を用いて説明したりするなど、自己の思いを効果的に伝えるための表現の工夫を行った。

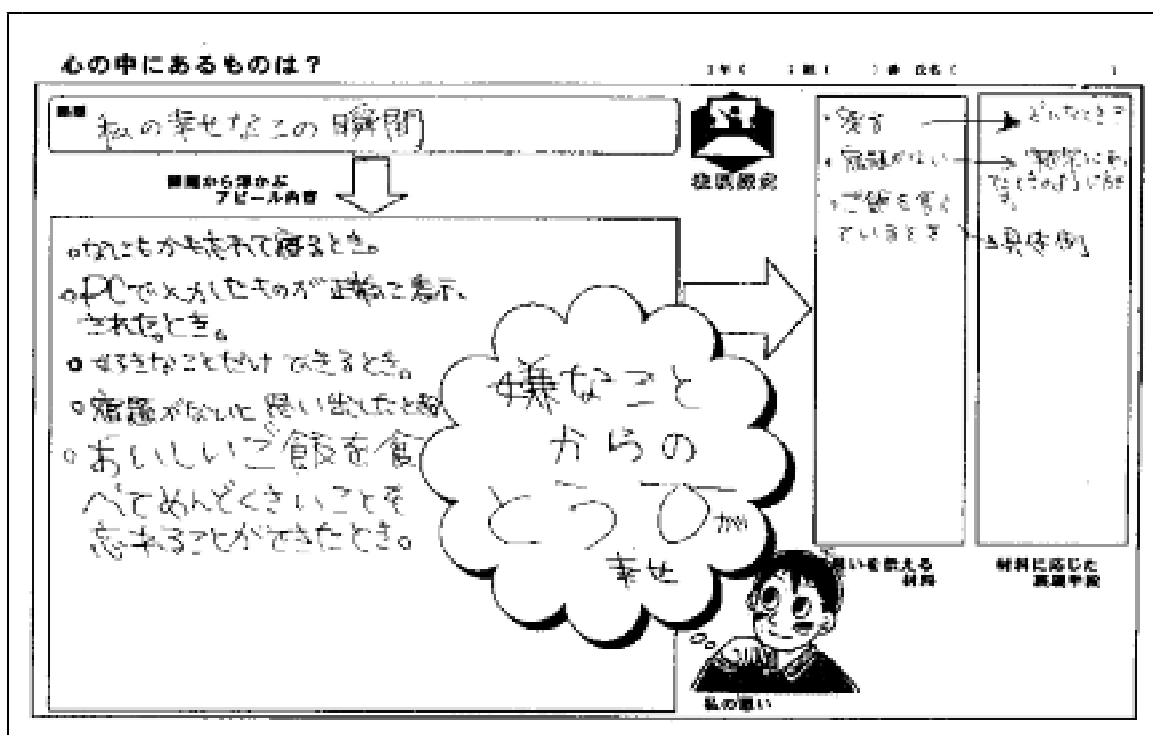


図3 生徒Aの学習シート

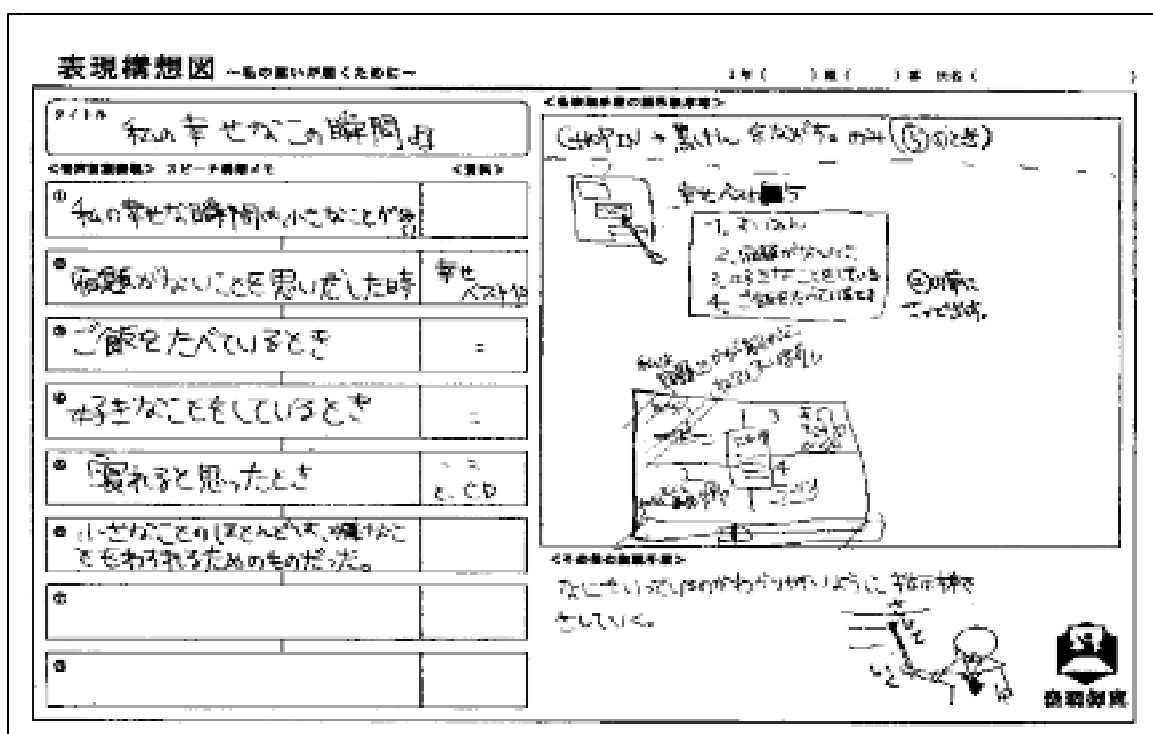


図4 生徒Aの表現構想図

最後に級友の前でスピーチを行わせ、それを互いに審査し合う活動に取り組ませた。生徒は級友のスピーチを審査することで、聞き手としての態度を身につけていった。また、自分のスピーチにはない表現の工夫やそれまで知らなかった級友の思いを知り、自然と拍手やうなずき、笑いなどが起こり、互いに認め合う場面が多く見られた。スピーチを行っている生徒は、生き生きとした表情を見せ、自己の思いを伝えることに喜びを感じている様子が見えた。

図5は、生徒Aの単元の最初の学習記録である。また、図6は同じ生徒Aの単元終了時の学習シートである。このように、最初はスピーチをあまり好きではないと答えた生徒Aが、単元の振り返りでは、スピーチが好きだと答えており、自己の表現に対する考えに変化が見られた。また、級友の意見を聞くことで、自分のよいところや悪いところを発見できたという感想も挙げていた。この振り返りでは、生徒Aのように「自分はスピーチは苦手だと感じていたが、実際行ったら楽しくて、また機会が欲しい」「級友に自分の思いを知ってもらうことで、前よりも多くの人と話しやすくなった」などの意見が多く見られた。



実際のスピーチの様子

○あなたはスピーチが好きですか。(数字を○で囲もう)

好きだ	まあまあ好きだ	あまり好きではない	好きではない
4	3	2	1

その理由(どうしてスピーチが・・・)

スピーチの内容を考えたのは面倒だから。人に見られたら声も枯れたり、はきははしくいって笑われるから。

図5 生徒Aの単元の最初の学習記録の一部

○自分のスピーチを自己評価してみましょう。あなたの意見は、変わったと思いますか。

好きだ	まあまあ好きだ	あまり好きではない	好きではない
4	3	2	1

○あなたもスピーチが好きですか。(数字を○で囲もう)

好きだ	まあまあ好きだ	あまり好きではない	好きではない
4	3	2	1

○単元の学習について感想を書きましょう。

今回の表現は、走っていったら見られながらの学習でしたが、見られてもいい意識をもち学習にとくむことができたと思います。とても上級生と対面練習スピーチをたくさんすることができた点も、自分よりよいところを発見する機会になりました。

図6 生徒Aの学習シートの一部

4 成果と今後の課題

これまで述べてきたように、さまざまな表現手段を組み合わせたスピーチづくりを行わせることは、生徒に自己の思いを表現することの喜びや、自己についてじっくりと考え、自己理解を深めたいという意欲を持たせるための活動内容として有効であることが分かった。また、自己の思いや考えを効果的に発信するために、表現を工夫しようとする意欲を高めたり、その力を身につけたりすることができた。一方、本実践を行う中で、自己のものの見方や考え方を発掘しながら、自己理解を深めるという活動内容から、特別活動の時間や道徳の時間との関連を明確にする必要性が課題として浮かび上がった。今後は、「自己を見つめる」という視点から、特別活動の時間や道徳の時間との重なりやつながりを考えながら、探究活動の内容を更に精選し、実践を重ねていきたい。

その2 学問探究 自然科学系講座「宇宙と人間」

1 実践に当たって

科学技術社会と言われる今日、私たちの生活を支え豊かにする科学技術の進歩には目を見張るものがある。しかし、日々の生活の中で科学の恩恵にあずかりながらも、そこに隠れた優れた技術やそれを生み出した人々の姿に気づく生徒は少ない。そこで、理科の学習内容とのつながりを大切にしながら、科学技術と日常生活とのかかわりやそれを支える科学技術者たちの姿をとらえさせることで、生徒の科学を見る視野を広げたいと考えた。本講座では、科学や科学技術の最先端の知見を結集して進められている宇宙科学・宇宙開発に焦点を当て、その現場で活躍する科学者や科学技術者をゲストティーチャーとして迎えて、話を聞かせることとした。この講座において、生き方や学問を追究する姿勢を学ばせ、自己の将来への展望を広げさせたい。なお、本実践は、平成17年度第2・3学年において行ったものである。

2 講座の指導計画（全32時間）

期	学 習 課 題	指 導 方 法	【 ゲストティーチャー 】
4	宇宙の始まりを知ろう	宇宙の始まりとはどのようなことか、ピックアップから物質、空間の生成についての最新の知見に触れさせる。	【 JAXA 赤外・サブミリ波天文学系名誉教授 松本 敏雄 】
4	宇宙科学 C 女 銀河形成と星の一生	われわれの銀河系、それを構成する星々がどのように誕生し、どのような一生を送るのかについて最新の知見に触れさせる。	【 JAXA 赤外・サブミリ波天文学系教授 松原 英雄 】
4	太陽系の誕生と地球	太陽系の誕生の過程を知ることにより、いかに地球が特別な惑星なのかを理解させる。	【 JAXA 惑星研究系助教授 田中 智 】
4	地球と生命の進化	地球における生命の誕生と進化を、宇宙の歴史の流れの中でとらえ、これからの地球の在り方を探らせる。	【 自治医科大学名誉教授 長野 啓 】
4	ロケットの過去・現在・未来	地球周回軌道への機器や人間の投入等の輸送システムとしてのロケットの仕組みと飛行の原理を学ぶ。また、その開発の歴史及び未来を眺望させる。	【 JAXA 宇宙航行システム研究系助教授 石井 信明 】
4	宇宙開発 C 女 宇宙への挑戦 ～熱気球から 宇宙飛行士へ～	人類による宇宙への挑戦について技術的、思想的側面に触れながら人類と宇宙のかかわりの歴史を紹介し、人類がなぜ宇宙を目指すのか考えさせる。	【 JAXA 宇宙教育センター長 的川 泰宣 】
4	人工衛星・探査機の最前線	日常生活における天気予報などの情報を支える実用衛星や、地球及び宇宙の謎を探究する科学衛星等の仕組みと役割を理解させる。	【 JAXA 宇宙科学情報解析センター教授 橋本 正之 】
4	宇宙ステーションから宇宙都市へ	現在の「国際宇宙ステーション」を基本に、将来の宇宙基地やスペースコロニーについて生徒たち自身にその在り方を考えさせる。	【 JAXA 宇宙プラズマ研究系教授 小山 孝一郎 】

3 授業の実践

(1) 受講生徒数

本講座の受講生徒数は、表7のとおりである。全8回の受講生徒数の平均をとると、1回につき約80名の生徒が本講座を受講したこととなる。その数は、第2・3学年全生徒数の約2割に当たり、生徒の宇宙に関する事項への興味・関心が高いことが分かる。

表7 本講座の受講生徒数

	宇宙科学コース				宇宙開発コース			
第2学年	72	38	38	30	58	36	35	49
第3学年	59	52	39	40	37	21	28	34
合計	131	90	77	70	95	57	63	83

(生徒数 第2学年：208名 第3学年：203名)

(2) 指導の実際

指導に当たっては、本講座のねらいを達成するため、次の3点に留意した。

宇宙科学や宇宙開発に関する最先端の内容を学ばせるため、日本における宇宙科学・宇宙開発研究の拠点である宇宙航空研究開発機構（JAXA）に学習支援を依頼する。

全テーマともに「人類はなぜ宇宙を夢み、宇宙を目指すのか」を考える授業とすることとし、個々のテーマについて最新の知見に触れることは元より、どのように講座が選択されてもよいように、8つのテーマそれぞれにおいて宇宙の歴史と仕組み、選択したテーマの歴史的位置づけが分かる講義内容とする。

各テーマの前半2時間をゲストティーチャーによる講義とし、その講義内容を受けて各生徒が個人の追究課題を設定し、後半2時間で追究させることとする。その際、前半終了後に追究課題を提出させ、類似したテーマごとに生徒を4～5名のグループに分けておく。

(3) 生徒の様子

各講義において、生徒はそれぞれの内容に対してたいへん興味を持ち、活発に質疑を行うとともに、意欲的に課題追究に取り組んだ。ここでは、特に生徒の個人追究課題の種類が豊富であった「宇宙開発コース 宇宙への挑戦～熱気球から宇宙飛行士へ～」の講義内容及び生徒の取組を述べることにする。

このテーマの前半では、JAXA 宇宙教育センター長である的川泰宣教授により、人類の宇宙活動への挑戦について、レオナルド・ダ・ヴィンチやアインシュタイン、糸川英雄など科学史や宇宙開発の鍵となる人物のエピソードを交えながら分かりやすく講義が行われた。そこでは、「本当にやりたいことを追求する姿勢を大切に」という熱いメッセージが送られた。的川教授の講義内容の抜粋を図7に示す。事前調査の時点では、ほとんどの生徒が「宇宙人はいるのか」「宇宙に住めるのか」などといった漠然とした追究課題しか持っていなかった。しかし、「冒険心・好奇心・匠の心・命の大切さ」の4つのキーワードを基に、宇宙時代を開拓した先駆者たちの取組や業績、最新の宇宙開発技術について講義を受けた後は、自分が宇宙に関する事項とどうかかわるかという視点に立った課題設定を行う生徒が出てきた。生徒の講義記録を図8に示す。



図7 講義内容の抜粋

★講義の内容を記録しよう！！

飛ぶことに対して憧れが外音からあった (二宮忠八) (1866-1956)

憧れ → 二宮忠八 1953 とびこらさずエスロ 航空機 (3022 生かされた)

飛ぶこと 二宮忠八 1866-1956

方向性 二宮忠八 1866-1956

昇降 二宮忠八 1866-1956

1903年12月17日 飛行機 ライト兄弟

1927年10月4日 飛行機 二宮忠八

1953年10月4日 飛行機 二宮忠八

1957年10月4日 飛行機 二宮忠八

1961年4月4日 飛行機 二宮忠八

1968年12月17日 飛行機 二宮忠八

1971年10月4日 飛行機 二宮忠八

1976年10月4日 飛行機 二宮忠八

1981年10月4日 飛行機 二宮忠八

1986年10月4日 飛行機 二宮忠八

1991年10月4日 飛行機 二宮忠八

1997年10月4日 飛行機 二宮忠八

2003年10月4日 飛行機 二宮忠八

2012年10月4日 飛行機 二宮忠八

2015年10月4日 飛行機 二宮忠八

2020年10月4日 飛行機 二宮忠八

2023年10月4日 飛行機 二宮忠八

飛ぶことに関する条件がある: 憧れ(好奇心) → ロケット → 宇宙飛行

徹底した学習 二宮忠八 1866-1956

100cm/s (10^2 cm/s)

10^3 cm/s (10^3 cm/s)

10^4 cm/s (10^4 cm/s)

10^5 cm/s (10^5 cm/s)

10^6 cm/s (10^6 cm/s)

10^7 cm/s (10^7 cm/s)

10^8 cm/s (10^8 cm/s)

10^9 cm/s (10^9 cm/s)

10^10 cm/s (10^10 cm/s)

10^11 cm/s (10^11 cm/s)

10^12 cm/s (10^12 cm/s)

10^13 cm/s (10^13 cm/s)

10^14 cm/s (10^14 cm/s)

10^15 cm/s (10^15 cm/s)

10^16 cm/s (10^16 cm/s)

10^17 cm/s (10^17 cm/s)

10^18 cm/s (10^18 cm/s)

10^19 cm/s (10^19 cm/s)

10^20 cm/s (10^20 cm/s)

10^21 cm/s (10^21 cm/s)

10^22 cm/s (10^22 cm/s)

10^23 cm/s (10^23 cm/s)

10^24 cm/s (10^24 cm/s)

10^25 cm/s (10^25 cm/s)

10^26 cm/s (10^26 cm/s)

10^27 cm/s (10^27 cm/s)

10^28 cm/s (10^28 cm/s)

10^29 cm/s (10^29 cm/s)

10^30 cm/s (10^30 cm/s)

飛ぶことについて、そこには、たくさん人の苦勞や命が費やされたことばかりで、とてもいいところはないとばかり言っていて、何もできないのだということもわかった。

図8 生徒の講義記録の例

生徒が設定した追究課題の一部を次に示す。

- ・二宮忠八の人生を調べよう
- ・ロケットが「飛ぶ」仕組みを実験を、通して調べよう
- ・モンゴルフィエ兄弟の人生を調べよう
- ・アポロ計画について、その価値を調べよう
- ・人類の「飛行」の歴史を調べよう

このテーマの後半では、類似した追究課題を持つ生徒同士でグループを作り、各自が準備した資料やゲストティーチャーの講義資料及び担当教師が準備した資料等を基に、作業分担しながら課題追究を行った。グループによっては、資料を基に調べたことをまとめるだけで終わるところもあれば、自分の興味とつなげて実験に取り組んだり、宇宙開発にかかわる職業に就くための学習の見通しを考えたりするなど、将来を見据えた追究を進めているグループも見られた。また、これまでの学習を生かして、理科室の工作用具を用いて自分で水ロケットを作り、実際に飛ばしたことで、以前の教科学習で行った「飛ぶ」という現象にこれまでとは違った感動を覚えたグループもあった。生徒が作成したレポートを図9に示す。調べてまとめるだけでなく、物を作ったり、将来の自分とのかかわりを考えたりすることにより、教科の学習を振り返る機会にもなっている。

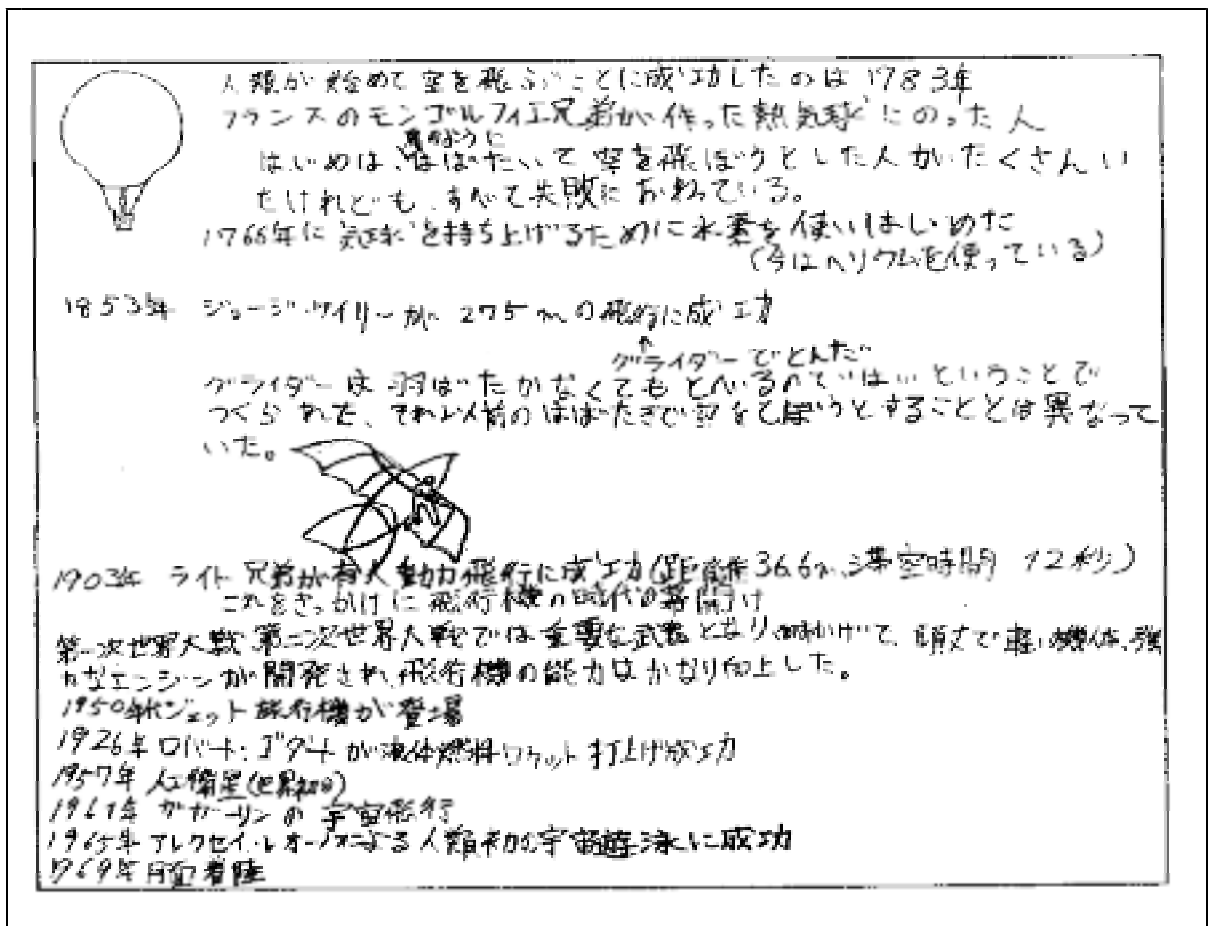


図9 生徒が作成したレポートの例

これまで宇宙や自然に興味を持ちながら、なかなか学習する機会を持てなかったと思われる生徒たちも、講師の先生に疑問をぶついたり、グループのメンバーと同じテーマについて話し合ったりすることで、今後の学習につながる最初の一步が踏み出せたようである。

4 成果と今後の課題

本講座を開設し、次に挙げるような成果を収めることができた。

講師の方々には情熱をかけてさまざまな研究に取り組まれている専門家であり、その講義内容だけでなく、先生方の生き方や学問を追究する姿に触れることができたことは、生徒にとって価値ある経験となった。

宇宙は理科だけでなく国語や数学、保健体育など多くの教科と関連を持たせて学習できる研究領域であり、生徒の興味を喚起しやすいと考えられる。

一方、次に挙げるような問題点や課題が残った。

宇宙にかかわる最新の知見を基に、身の回りの事物・現象を見つめ直す講義内容としたものの、その知見を理解するレディネスの不足もあり、興味深く取り取む一方で、生徒によってはあまりにもかけ離れた内容となったようである。このことから、最新の知見と生徒をつなぐ教材の開発が必要である。

その3 社会探究

1 実践に当たって

社会探究の学習においては、人類や社会の諸問題の中から、課題を設定し、追究することとなる。このような学習を行わせる際、ニュースや新聞、インターネット等を用いて調査することは、比較的容易にできるものの、自己とのかかわりを考えながら追究を進めるには、追究課題が具体的・現実的ではなく、追究や解決の場面での活動に深まりが不十分な生徒が見られることがある。

そこで、課題設定場面を充実させ、生徒に適切な追究課題を見いださせるとともに、その後の追究や解決の場面における活動を深まりあるものにする必要があると考えた。本実践では、適切な追究課題を設定することができるように、課題設定前の調査や検討の場を十分に確保し、工夫したことについて述べることとする。

2 学習活動の実際

(1) 教師によるガイダンス

課題を設定するためには、現代における人類や社会の諸問題についての情報を、幅広く知らせ、興味・関心を高める必要がある。そこで、「人類や社会の諸問題に関する意識調査」を行い、現在、生徒が興味を持ち、追究したいと考えている内容を把握することとした。次に、この調査で挙げてきた内容を分類することで、8つのテーマを設定した。その際、生徒の興味・関心が低いものにも注目し、テーマに加えた。このようにして設定した「環境」「政治」「経済」「健康」「人類」「情報」「平和」「文化」の8テーマについての講話を学年所属教師が行い、生徒に感想をまとめさせた。図10は、教師が準備したガイダンス資料の例である。

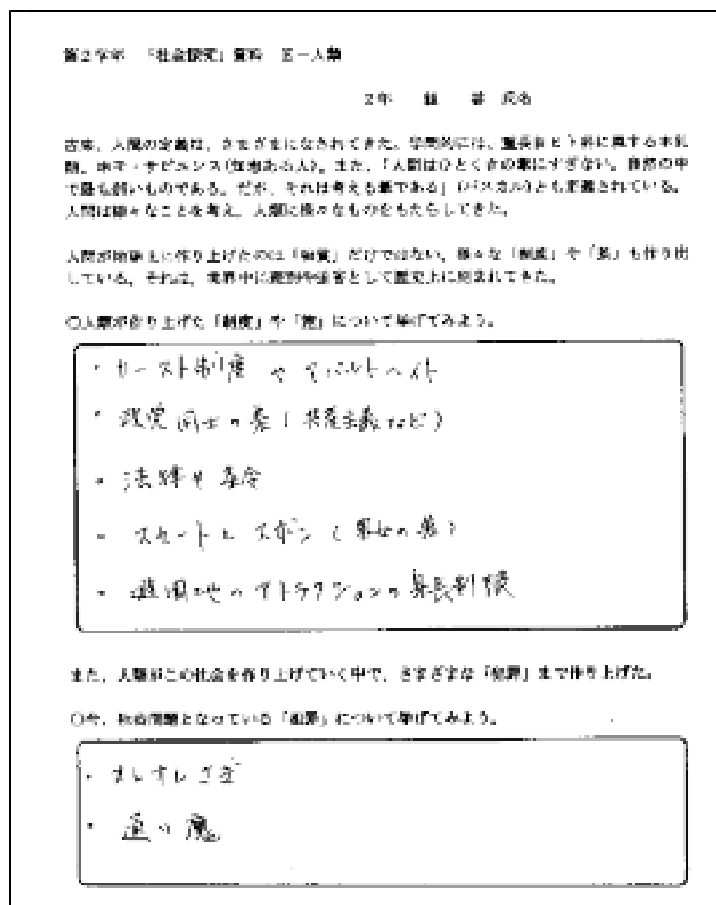


図10 教師によるガイダンスの資料の例

(2) 追究課題案の設定

教師ガイダンスにより，人類や社会の諸問題に対する生徒の興味・関心を高めさせた後，新聞記事から興味を持ったものを取り上げさせたり，インターネットを活用させたりしながら，現代社会におけるさまざまな課題を調査させることで，追究課題案を設定させた。次に，設定した追究課題案の内容を8つのグループに分類し，同じグループ内で個人で収集した情報を基に意見交換を行わせ，追究課題として適切かどうかを吟味させた。また，追究課題案については，学級内で発表させることで，他のグループの意見も適切な課題になっているかを吟味する際の参考とさせた。さらに，教師との面談を行い，追究課題案が追究可能な課題となるよう指導した。

(3) 共通課題の追究

追究から解決までの活動の流れに見通しを持たせることで，自己の課題が適切かどうか吟味する力が高まると考え，共通課題を設定して追究させることとした。活動のまとめでは，レポートを作成させ，学級内での発表会を行い，相互評価の場面を設けた。相互評価の意見としては，「自分の考えが詳しく多く述べられていてよかった」「視点を持って自分の考えを追究している点がよいと思った」などが挙げられ，生徒は，視点がしっかりと焦点化されていたり，自己と課題とのかけわりが考えられたりするような課題の設定が望ましいことを学んでいた。図11にレポートの例を示す。

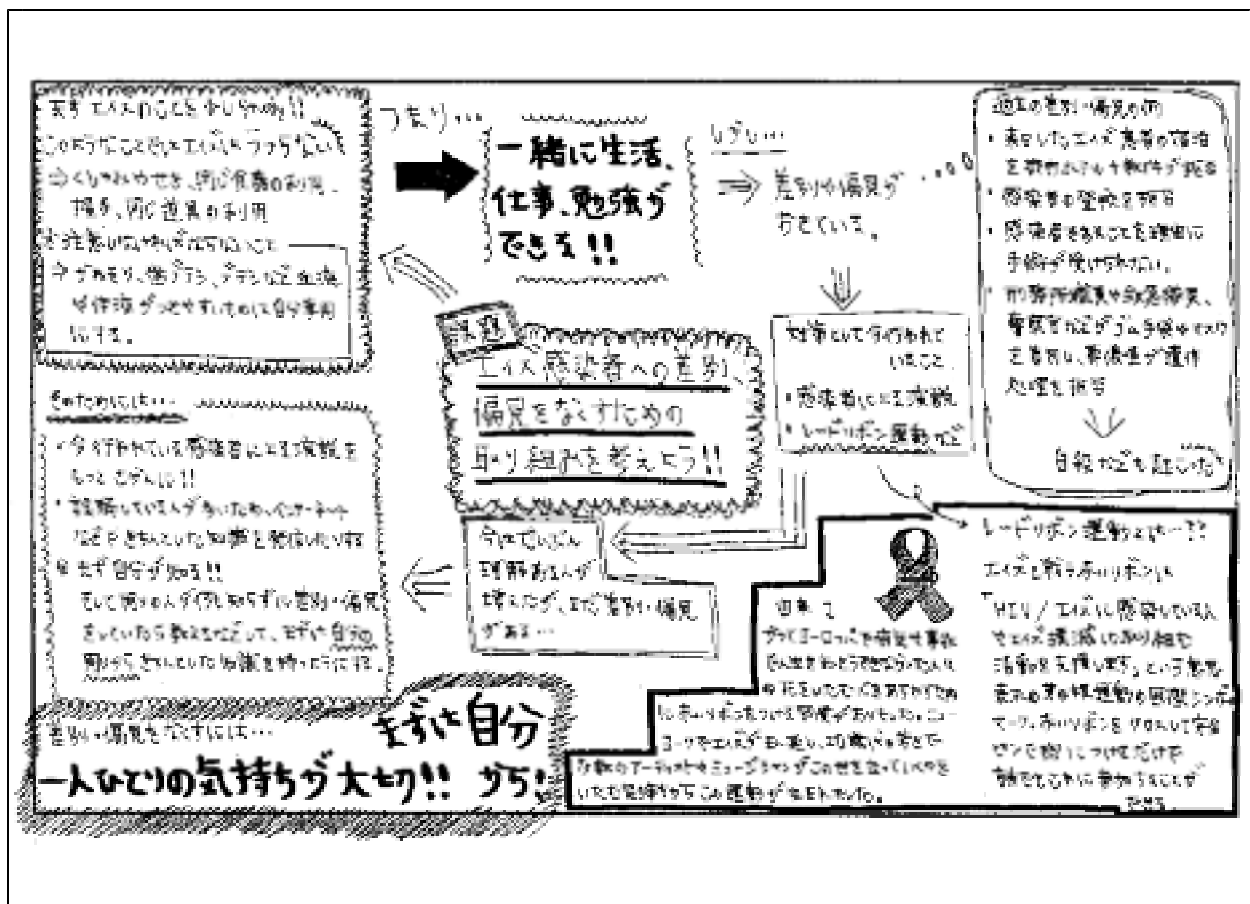


図11 共通課題のレポートの例

(4) 3年生によるガイダンス

共通課題の追究により、活動の流れに見通しを持った生徒に、第3学年の生徒によるガイダンスを行わせた。このガイダンスでは、既に社会探究の活動を終えた第3学年の生徒が、これから追究活動を行う生徒に、実際に追究した課題や追究方法、まとめ方についてアドバイスをを行った。生徒はガイダンスを受けながら図12のような記録をとった。また、ガイダンス終了後には、「どのように課題を設定し、調査やまとめを行えばよいか」が具体的に分かった。「追究の仕方にいくつかのアドバイスもらったので、これからに生かしたい」などの感想が見られ、ガイダンスで得た助言を自分の課題設定や追究、解決に役立てようという意欲を持ったことが分かり、自己の追究課題案を再検討する機会となった。



第3学年の生徒によるガイダンスの様子

(5) 追究課題の決定

生徒は、教師ガイダンスや面談、共通課題の追究、第3学年の生徒によるガイダンスを受ける中で、追究課題案を吟味し、自己の追究課題を明確にしていた。追究課題の決定に際しては、保護者と相談する機会も設定し、図13に示すように、追究課題届に保護者の考えや思いを記入してもらった。生徒は、自己の興味・関心だけでなく、自己とのかかわりという視点から課題設定を行っていた。表8に生徒の追究課題の例を示す。

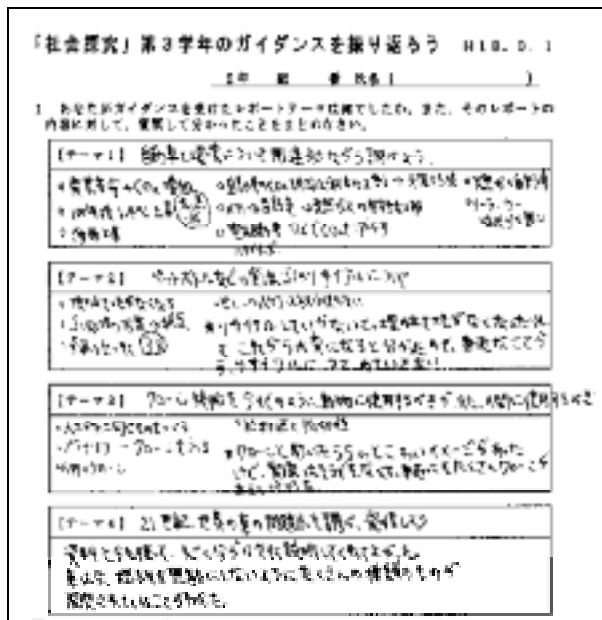


図12 3年生によるガイダンスの振り返りシート

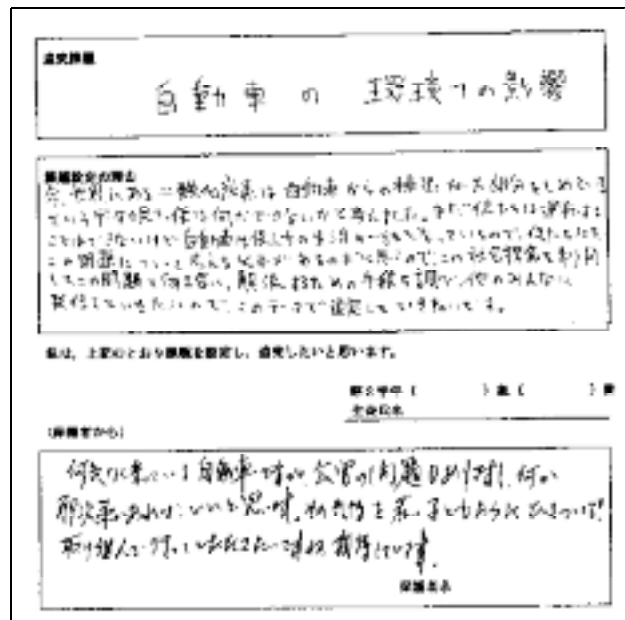


図13 追究課題届の例

表8 追究課題の例

グループ名	追 究 課 題
人 類	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の難民について知り，私たちのできることについて考えよう ・クローン技術の進歩と必要性について
健 康	<ul style="list-style-type: none"> ・ストレス社会の現状を知り，対処法を考えよう ・鳥インフルエンザに対する世界の取り組みと，予防法について追究しよう
平 和	<ul style="list-style-type: none"> ・日本が国連の常任理事国に入りすることと平和の関係は... ・動物虐待をなくすために自分ができることを考えよう
文 化	<ul style="list-style-type: none"> ・長崎の伝承問題について今と昔を比較してみよう ・日本と他国との英語力・英語教育の比較しよう
情 報	<ul style="list-style-type: none"> ・個人情報はどうのようにして守られているのか ・インターネットウィルスと対策法について追究しよう
政 治	<ul style="list-style-type: none"> ・年金制度はどうなるのか，僕の世代までカバーできるのか ・日本にある米軍基地によって引き起こされる問題とその解決法を考えよう
経 済	<ul style="list-style-type: none"> ・株の仕組みと私たちのかわりについて探ろう ・日中の「経済面」から見た今とこれからの発展について知ろう
環 境	<ul style="list-style-type: none"> ・自動車による地球温暖化は，止めることができるのだろうか ・異常気象が引き起こす被害について調べ，対策を考えよう

3 成果と今後の課題

本実践を通して，次のような成果を上げることができた。

教師によるガイダンスやグループ，学級での意見交換により，何度も課題を検討させる機会を与えることで，人類や社会の諸問題の中から課題を見だし，課題を設定する力を高めることができた。

共通課題の追究や第3学年によるガイダンスにより，活動に見通しを持たせることは，追究課題を再検討し，課題を吟味する上で有効であることが分かった。

一方で，次に示すような課題も明らかとなった。

人類や社会における諸問題に関する生徒の興味・関心や設定された課題が多岐にわたっているため，教師によるガイダンスの内容や個人面談における対応の在り方を再検討する必要がある。

その4 教科探究 保健体育B「スポーツの歴史を探る」(応用・発展型)

1 実践に当たって

保健体育科では、「体育に関する知識」の学習として年間10時間を確保している。その中で、スポーツの起源やルールの変遷等については、単元の始めのオリエンテーションの中で触れる程度である。生徒の中には、「興味のあるスポーツを調べてみたい」等の意見が挙げられ、より詳細にスポーツの歴史について知ることで、現在行われている競技方法の理解を深めたいとする積極的な姿勢が見られた。そこで、応用・発展型としてスポーツの歴史に関する講座を開設した。本実践では、自己の追究したいスポーツを選択させ、資料やインターネットで検索しながら、それらをまとめることを通して、スポーツの理解を深めるとともに、保健体育科に対する見方や考え方に新たな視点を与えることをねらいとした。

2 指導計画

14時間の中で生徒が主体的に学習が進められるように、講座の目標や指導計画を次のとおり設定した。

単元及び指導目標	時	指導内容	指導方法等
<p>講座オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本講座のねらいを理解させ、学習意欲を高める。 	1	<ul style="list-style-type: none"> ・講座のねらい 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習目標を提示し、学習のねらいを明らかにするとともに、ガイダンスを行い、学習の手順を説明する。 ・生徒のスポーツの種目に関する興味・関心の実態を把握するためアンケートをとる。
<p>学習課題を解決しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己の学習計画を基に、課題を追究させる。 	1	<ul style="list-style-type: none"> ・解決方法の整理 ・自主計画の立て方 	<ul style="list-style-type: none"> ・身近にあるスポーツの種類についてのアンケート調査を分析し、自己の興味・関心について振り返らせる。 ・これからの学習について、学習の課題を考えさせ、自己の学習計画を立てさせる。
	10	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツの起源とルールの変遷についての課題の追究 ・ニュースポーツの考案 ・ノートの整理とその生かし方 	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネットや資料を用い、スポーツの起源とルールの変遷について調査させる。 ・調査結果を基にして、各自にニュースポーツを考えさせる。 ・次時以降の学習に生かせるように、自己の学習成果や課題を毎時間記録させておく。また、時間を設けて学習状況を説明させ、計画の修正等助言を行う。ノートを適宜回収し、学習課題に対する各自の取組を確認し、コメントを書き加える。
<p>学習を振り返ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習の成果を確認させるとともに、新たな課題を見いださせ、課題解決の意欲を高める。 ・講座の取組を振り返らせることにより、保健体育科の学習への考えを深めさせる。 	2	<ul style="list-style-type: none"> ・各自の課題追究の成果と課題 ・新たな課題の生かし方 	<ul style="list-style-type: none"> ・ノートを整理させるとともに、スポーツに関する自己の興味・関心を再度を振り返らせる。 ・今期の学習成果や今後の課題等を確認させる。

3 学習活動の実際

(1) 「スポーツの起源を探る」における指導の方法と実際

スポーツの起源を探る場面では、個人で興味のあるスポーツを選択させ、それらについて調査させた。実際の内訳は、「野球1名、バドミントン3名、バスケットボール3名、サッカー2名、アメリカンフットボール1名、新体操1名、ライフル射撃1名、空手1名、クリケット1名」であった。所属している部活動や習い事のスポーツを選択する生徒が多い中、メディア等で興味を持ったスポーツや将来経験してみたいスポーツを選択している生徒もいた。調査方法としては、資料やインターネットで検索した結果をノートに丁寧にまとめていった。さらに、毎時間、教師との個人面接を行い、調査した内容について教師側が質問をしたり、生徒が興味を持った事柄について各自で説明したりして、スポーツの起源やルールの変遷についてより理解を深めさせた。新しく発見したことを話す生徒の目は、生き生きとしており、知らなかったことを知ることができたという喜びに満ちていた。以下に生徒のノートの例を示す。

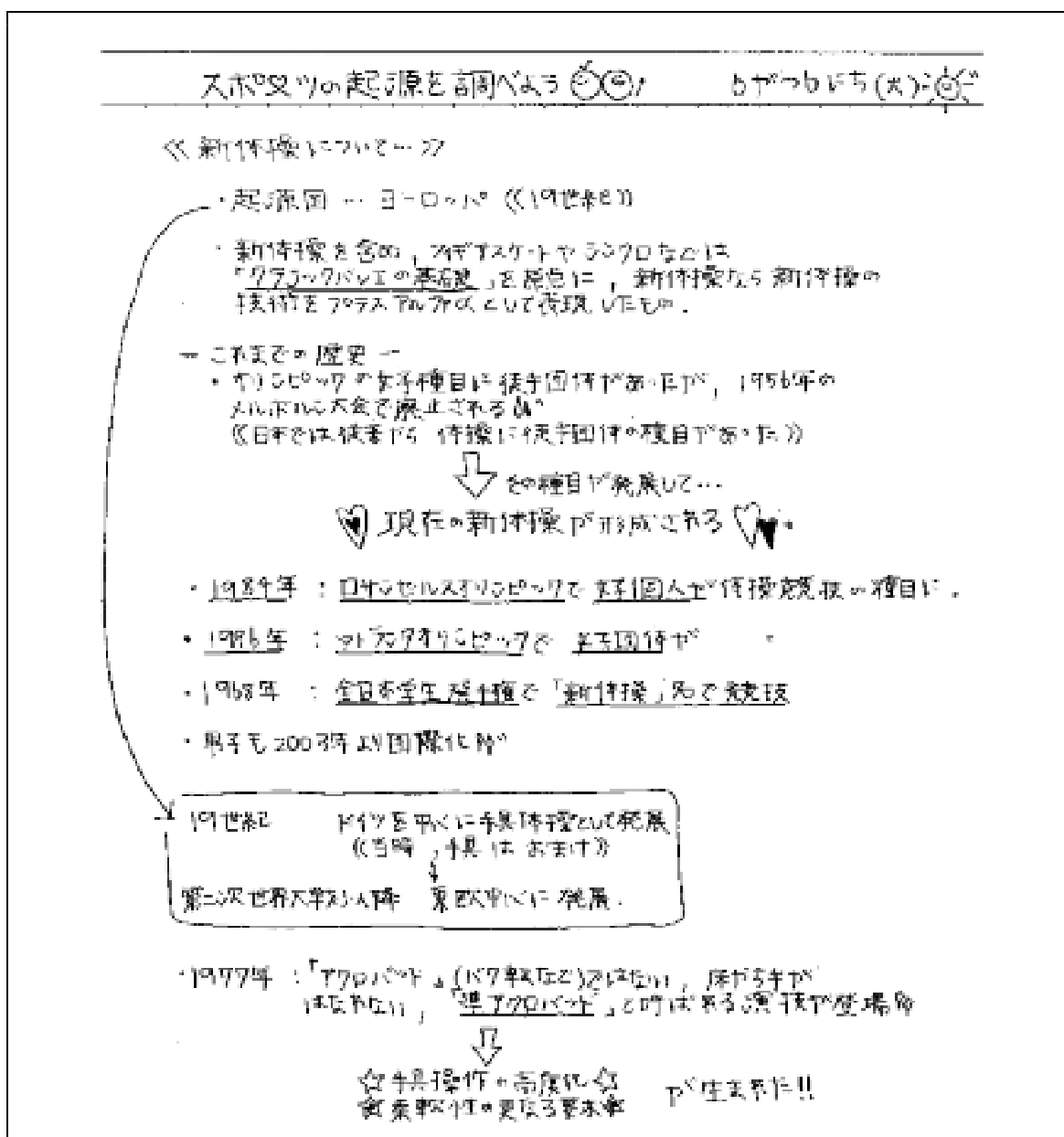


図14 新体操について調べた生徒のノート

(3) 評価

評価については、毎時間の振り返りを図16に示す学習計画表に書かせるとともに、個人面接の中で対応した。毎時間の振り返りの中では、「意欲、追究、成果」をA、B、Cの3段階で自己評価させるとともに、授業の反省を文章表現で書かせることで次時への取組につなげさせた。最後の時間には、全体的な振り返りを記録に残させるとともに、教師側のコメントを書き添えた。図17に振り返り用紙の例を示す。

第3学年教科探究「スポーツの歴史を調べる1」学習計画表

3年()組()番()

教科探究の目標 授業内容に基いて自主的に学習の進捗や理解を振り返り、意欲を高め、達成すること。活動中に自分の学習について考える。

自分の学習目標 新体操の起源やルールの変遷について知りたい。

目標達成のために

日 時	学習内容	意欲・追究	自己評価
5月25日 4.50分	新体操の起源	新体操の起源について調べた。	意欲 A 追究 A 成果 B
5月26日 4.50分	スポーツの歴史を調べる	ルールの変遷について調べた。	意欲 A 追究 A 成果 A
5月27日 4.50分	新体操の歴史	新体操の歴史について調べた。	意欲 A 追究 A 成果 B
5月28日 4.50分	ルールの変遷	ルールの変遷について調べた。	意欲 A 追究 A 成果 A
5月29日 4.50分	新体操の歴史	新体操の歴史について調べた。	意欲 B 追究 A 成果 A

図16 学習計画表の一部

教科探究 学習の振り返り

〇毎時間の振り返りを調べる。次の欄に記入して振り返り用紙に記入しよう。

教科名(体育) 姓(山崎) 名(真)

自分の振り返り

私は、レポート書きなど、調べたりすることも好きなので進歩しました。そして、今までと教科が違って面白いです。あんなに楽しかったのは、体育の授業以来です。

自分が選んだスポーツの「起源」を調べる。そしてそのスポーツのルールの変遷を調べる。個人の「ニュースポーツ」を考える。

バスケットボールは昔ながらの行っているけど、正式なルールは知らなかった。今回調べる事ができてよかった。

新体操の歴史を調べる。そのルールはどうかしたら「正式化するのを知りたい」と思った。またルール変遷も、どの部分もどこのようにして決めているのかも、知りたいと思った。

この授業の学習について考えたこと
ニュースポーツを考える。こういう事をするんだと思った。だから、今日はいい経験ができた。ルール変遷も調べるのが、楽しかった。おもしろい授業。

(教師側記入欄)

新体操の歴史について、インターネットで調べた。調べた内容をまとめた。新体操の歴史について、調べた内容をまとめた。新体操の歴史について、調べた内容をまとめた。

図17 生徒の振り返り用紙の例

4 成果と今後の課題

本講座終了時の生徒の感想において、「スポーツの歴史を探ることでスポーツがもっと好きになった」「1つだけでなく、もっと多くのスポーツを調べて、ニュースポーツの作成に生かしたい」「ルールはどうやったら正式化し、だれがそれを決めているのか知りたいと思った」などの意見が見られたことから、スポーツに対する興味・関心を高めることができたと考える。また、「体育は実際の活動も楽しいけれど歴史を学んだりするのも大事でおもしろい」といった意見もあり、生徒の教科に対する見方や考え方に新たな視点を与えることもできた。一方で、調査が早く終了してしまう生徒や円滑に進まない生徒が見られるなど、追究課題の設定のさせ方や学習計画の立て方の指導には、課題を残した。今後は、教科に対する生徒の興味・関心を更に高めていくために、新たな講座内容を開発したり、考案したニュースポーツが実際に可能なものかを実践して確かめる場面を講座内に設定したりして、実践を重ねていきたい。